

公益財団法人日本バスケットボール協会

2018 年度事業報告

<事業の概況>

2018（平成 30）年度の公益財団法人日本バスケットボール協会は、『JAPAN BASKETBALL STANDARD 2016』（以下、JBS2016）を機軸とした新たな方針・改革路線の実行と、「Break the Border」の精神のもとに、バスケットボール界全体の体制改編・強化の 2 点を基本方針として事業を行った。その中でも重点実施事項は、（1）ガバナンス改革の実行、（2）代表チーム・審判・指導者・マネジメント人材の強化育成、（3）マーケティング戦略の推進と拡大、の 3 点であった。

(1) ガバナンス改革の実行

JBA では 2018 年度より、それまで各団体（地区・市区郡町村協会、連盟）が独自に設定・徴収していた登録料（チーム、競技者、審判員、指導者）の設定・徴収権限を JBA と都道府県協会に一元化する新登録制度体系を導入した。これには、地域によってバラつきのあった登録料を是正することで、競技者にとってより公平感のある制度として整備し、加えて競技環境の更なる充実を図ることで登録者のメリットを拡大したいという意図がある。

また同時に導入された D-fund 制度は、新登録制度体系の施行に伴って生じる財政の歪みを是正するとともに、JBS 2016 に基づき JBA が推進する事業（競技環境の整備・充実、普及、育成等）について、都道府県バスケットボール協会がそれぞれの地域性・主体性・独自性を発揮しながら事業を推進、活性化することを目的に、JBA が登録料収入および事業収入を原資として都道府県バスケットボール協会に交付するものである。都道府県協会が、自身の内部組織（委員会や部会等）を含め、傘下団体（地区・市区郡町村協会、都道府県連盟）の組織面、事業（競技会、各種会議等）面、会計（財務）面について実態を把握し、管理可能な状態を構築することで、都道府県におけるガバナンスの構築・強化を図ることを目的としている。

また本年度は、バスケットボール界の規律事案、裁定事案に対処するため、JBA のみならず、各都道府県協会においても規律規程・裁定規程の整備と規律委員会・裁定委員会の設立を推進した。

新しい制度の定着には多少の時間が必要と考えられるが、着実に遂行することにより、バスケットボール界のガバナンス強化を図っていく所存である。

(2) 代表チーム、審判、指導者、マネジメント人材の強化育成

リオ・ラマスヘッドコーチ率いる男子日本代表チームは 2019FIBA バスケットボール・ワールドカップアジア 1 次予選において、序盤は黒星が先行したものの、ニック・ファジーカス選手（帰化選手）、八村塁選手（ゴンザガ大学所属）、渡邊雄太選手（メンフィス・グリズリーズ所属）の新規加入もあり、日本で開催した 2006 年大会以来の FIBA バスケットボール・ワールドカップの出場権を獲得した。また、この活躍も考慮され、2020 年東京オリンピックの開催国枠での出場権も獲得することができた。

2018 年 FIBA 女子バスケットボール・ワールドカップにおいて日本女子代表チームは、予選リーグを突破してベスト 16 に進出したものの、ベスト 8 決定戦で同じアジアのライバルである中国に破れ、メダル獲得には至らなかった。しかし、日本女子代表チームの戦いは世界でも高評価され、男子と同様に、2020 年東京オリンピックの開催国枠での出場権を獲得した。

3×3 は 2020 年東京オリンピックから正式種目となるが、日本では 3×3 の普及が他国と比較しても進んでおり、また男女とも世界ランキングが一桁でもあることから、開催国枠での出場権を獲得した。結果として、全 4 カテゴリーにおいて 2020 年東京オリンピックの出場権を獲得することができ、代表チームの強化には大きな成果が得られたものと言える。

審判および指導者に関しては、ライセンス制度の刷新と定着を着実に実行し、ライセンス取得者数はここ数年で大幅に伸びている。また、各種養成プログラムも充実し、2019年度からはインテグリティ教育にも力を入れることとなっている。JBAが進めている審判及び指導者養成の取り組みは、バスケットボールの普及・育成・強化のための基盤づくりにおいて、着実に歩を進めている。

本年度はまた、JBA、公益社団法人ジャパン・プロフェッショナル・バスケットボールリーグ（以下、Bリーグ）、B.MARKETING（以下、BMK）株式会社、一般社団法人ジャパン・バスケットボールリーグ（以下、B3リーグ）が共同で「バスケットボール・コーポレーション株式会社（以下、BCP）」を設立した。BCPは上記4団体をつなぐハブの機能を有する会社として、競技統括団体、リーグ、事業会社を一つにまとめる機能を果たし、バスケットボール界をさらに発展させることを目的としている。BCPの設立・稼働に伴い、今後4団体の職員はBCPに転籍し、人材交流・人材育成・人材登用などを行ってバスケットボール界の一体化を図りながら、マネジメント人材の育成や組織強化に努めていく。

(3) マーケティング戦略の推進と拡大

本年度は、男子日本代表チームの活躍もあり、男子日本代表戦のチケットは完売が相次ぎ、各メディアにおける露出も増え、大会の価値が大幅に向上した。またウインターカップをソフトバンクグループ株式会社と共同事業として開催することで、スポンサー企業が増えるとともに、SNS、TVを中心に大幅に露出が増える結果となった。

今後、男子日本代表戦、ウインターカップだけでなく、天皇杯・皇后杯、Bリーグの主催試合をはじめとする全てのバスケットボール競技の価値向上を図るため、BMKへの収益事業の集約と人員の充実に向けて再構築を進めている。これにより、2019年度以降はより一層のマーケティング戦略の推進と拡大が期待される。

<活動報告（概況）>

I 日本代表関連

1. 男子日本代表概況

男子強化の2018年度最大の目標は、FIBAバスケットボールワールドカップ2019アジア地区1次・2次予選を突破し、ワールドカップ本選の出場権を獲得することであった。2017年11月のホーム・フィリピン戦に惜敗し1次予選は4連敗からのスタートであったが、海外での経歴はもちろん国内トップリーグでのMVP受賞等、数々の実績を持つニック・ファジーカスの帰化申請が許可され、長らく日本のウィークポイントであったインサイドの強化に着手。そして八村塁選手の所属先との良好な関係構築と交渉を積極的に行い、タイトなスケジュールであったが招集に成功することでチームレベルが飛躍的に向上し、6月29日のWindow3@千葉ポートアリーナでNBA選手を擁する世界トップランカーのオーストラリアに勝利した。

その後は、日本人2人目のNBAプレーヤーとなった渡邊雄太選手も加わり、Window4では9月17日@大田区総合体育館でアジアの強豪・イランを破り勢いに乗ると、富山県で開催されたWindow5ではタフなリーグ戦を乗り越え、レベルアップしたBリーグの選手が躍動し連勝記録を更新。そしてワールドカップ本選出場が掛かったWindow6でも、1次・2次予選を通じてチームとしての結束力が高まった日本代表が、アウェイでのイラン、カタール戦に勝利し、2019年9月に中国で開催されるワールドカップ本選の出場権を21年ぶりに自力で獲得した。

一方、昨年8月に開催された第18回アジア競技大会では代表選手による不祥事が発生し、当該4選手に対して出場停止処分が科されることとなった。競技力向上のみならず、日本代表選手・スタッフとしての人間力、指導力、組織力を高めるためインテグリティの精神（誠実さ、真摯さ、高潔さ）の重要性を再認識。その後、代表活動が行われる際は、男女、シニア、アンダーカテゴリー代表を問わず、適時インテグリティ教育の啓発活動に務めている。

またアンダーカテゴリーにおいては、一気通貫プロジェクトをスタートさせ、シニア代表のアシスタントコーチをアンダーカテゴリーのヘッドコーチに配置した。トップカテゴリーの戦略戦術をはじめ、代表として「勝つため」に必要な不可欠なメンタリティー強化をアンダーカテゴリーから根付かせ、またU16代表とU18代表、U18代表とU22代表というような合同合宿を計画し、

これまで年代別のカテゴリーで分けし強化していた流れの抜本的な見直しを行った。そして世界レベルに基準を合わせ、サイズのある選手のポジションアップを試みた。新しい強化プロジェクトのもと、2019年1月に行われたU16代表チエコ遠征での「クリスタル・ボヘミアカップ」では優勝を果たしており、女子代表同様にアンダーカテゴリーの世界カップに出場すべく継続的な強化活動を実施している。

<主な国際大会の成績>

- ・ FIBA バスケットボールワールドカップ 2019 アジア地区 1次・2次予選（8勝4敗）本選出場権獲得
- ・ 第18回アジア競技大会（インドネシア・ジャカルタ）7位

2. 女子日本代表概況

アジアカップでの3連覇を達成した女子代表にとって、2018年度はワールドカップでのメダル獲得、そしてその先続く東京2020での最大目標に向けた布石と位置づけられる年であり、4月より代表候補選手52名を招集、8月のアジア競技大会、そして9月のワールドカップと、2つの代表チーム編成を想定して強化活動をスタートした。

リオオリンピックの主力であった吉田、大崎、渡嘉敷といった3選手を欠きながらも、5月、6月に中国、ベラルーシ、チャイニーズ・タイペイを招聘した国際強化試合（非公開含む）では、対戦チームを翻弄する試合展開を披露。そして7月に行ったスペイン遠征では、世界ランキング2位のスペインに対して僅差で敗れはしたものの、世界との戦いを意識したトム・ホーバスヘッドコーチを中心とした強化の方向性に手応えが感じられた。続く8月にカナダを招聘した新潟県長岡市、そして群馬県高崎市で開催された国際強化試合でも女子代表は連勝。そして9月初旬に実施したアメリカ遠征においても、世界ランキング1位のアメリカに対し試合終盤までリードを保つといった互角の戦いを演じ、ワールドカップ本選での活躍が期待された。9月22日に開幕したワールドカップでは、予選ラウンド初戦の強豪スペインには敗れはしたものの、続くベルギー、プエルトリコに連勝し予選ラウンドグループ3位（2勝1敗）で通過。しかしながら決勝トーナメント初戦で中国に6点差で惜敗し、悲願のメダル獲得とはならなかった。今年度はリーグや選手の所属先の協力もあり、これまでにない長期の代表強化活動を実現することができた一方、国内合宿、海外遠征による疲労が重なり、ピーキングの持って行き方に課題が残るものとなった。

また並行して強化活動が行われたアジア競技大会では、女子日本B代表が銅メダルを獲得。そして3x3代表選手としても同大会に挑んだ馬瓜ステファニー選手が、銀メダルを奪取するといった嬉しいニュースもあったが、5人制代表と3x3代表を兼務する選手における、競技日程をふまえた調整やチーム強化の施策について課題が残るものとなった。

女子代表ではユース時代からの一貫した継続的な指導を行うと共に、長期的な選手育成・強化体制の構築を図るための「一気通貫プロジェクト」が浸透しつつある。またアンダーカテゴリーでもスポーツパフォーマンスのスタッフが帯同することで、若い年代から成長に伴う体の使い方や、トップ選手へと移行する上での段階的な意識付けができており、7月に開催されたFIBA U17女子バスケットボールワールドカップ2018では7位、そして10月のFIBA U18女子アジア選手権大会では準優勝を果たし2019年のU19ワールドカップの切符を勝ち取る等、どの年代でも継続的にワールドカップに出場できる礎が整えられてきている。

今後さらなる代表強化を図っていくためには、2017年から実施を始めたシニア～U19世代の合同合宿や年代に捉われない有力選手を招集する等、カテゴリーを縦断した機会を創出していく一方、スキルコーチによるドリルやゲーム等を行い、チームだけでなく個々の選手のレベルアップ・ポジションアップに努めていくことが重要であると考える。

<主な国際大会の成績>

- ・ FIBA 女子バスケットボールワールドカップ 2018（スペイン・テネリフェ）7位
- ・ 第18回アジア競技大会（インドネシア・ジャカルタ）3位
- ・ FIBA U17女子バスケットボールワールドカップ 2018（ベラルーシ・ミンクス）7位

3. 男子 3x3 日本代表概況

2018 年度の 3x3 代表活動は、4 月 13 日から韓国で開催された FIBA 3x3 韓国ワールドツアー・チャレンジャーからスタート。2017 年 6 月に 3x3 がオリンピック種目と発表される以前より、この種目を牽引してきた落合、鈴木、野呂、小松ら 4 選手で挑んだ大会であったが、課題とされていたフィジカルコンディションに対応できずロシア、モンゴルに敗れての 15 位という成績に終わった。しかし同じ布陣で臨んだ 4 月 29 日から行われた FIBA 3x3 Asia Cup 2018（中国・深圳市）では、準決勝で優勝したオーストラリア戦に 16-18 と惜敗したものの、3 位決定戦でニュージーランドに 21-20 と僅差で勝利し銅メダルを獲得。大会ベスト 3 として鈴木慶太選手が選出された。

そしてこの年の最大の目標でもあった 6 月の FIBA 3x3 ワールドカップ 2018（フィリピン・マニラ）においては、初めて B リーグ選手も含めたメンバー構成でエントリーをしたが、大会直前の体調不良のため Asia Cup と同じ落合、鈴木、野呂、小松を主力選手として参戦。5 チームで構成されたグループ B に属する男子代表は、エストニア、スロベニア、ポーランドに 3 敗し、インドネシアに勝利するものの目標としていた決勝トーナメントへの進出はならず参加 20 ヶ国中 15 位という成績であった。年度当初より同じメンバーで組成し代表強化を続けてきたこともあり戦術的な部分や連携・連動は図れたが、個人のスキルやサイズアップといった、世界レベルで戦っていくための課題が浮き彫りとなった大会になった。また 8 月に初めて正式種目となったアジア競技大会（インドネシア・ジャカルタ）では、杉本、松脇、荒川、宮越の大学生プレーヤーで挑み予選リーグ 1 位（4 戦全勝）で決勝トーナメントに進出したが、予選で怪我をした杉本天昇選手を欠く男子代表は、交代要員がおらずスタミナで苦しみ準々決勝進出で 5 位に終わった。

9 月には 3x3 日本代表のディレクターコーチとして、トースティン・ロイブル氏の就任が発表され、2019 年 2 月には初めて B.LEGUE 選手も含めた本格的な代表候補合宿が行われた。2018 年世界ランキング 4 位の日本が、東京 2020 に向けてどのような 3x3 のスタイルを確立し強化を行っていくか、今後のポイント獲得も視野に入れた強化プランの策定が求められる。

<主な国際大会の成績>

- ・ FIBA 3x3 ワールドカップ 2018（フィリピン・マニラ）15 位
- ・ FIBA 3x3 ASIA CUP 2018（中国・深圳市）3 位
- ・ 第 18 回アジア競技大会（インドネシア・ジャカルタ）5 位
- ・ FIBA 3x3U18 ASIA CUP 2018（マレーシア・サイバージャヤ）5 位

4. 女子 3x3 日本代表概況

女子代表が初めて出場することとなった FIBA Asia Cup 2018 は、男子同様に中国・深圳市で開催された。元 5 人制日本代表・W リーグ選手（石川、立川、名木、前田）で構成された女子代表だが、3x3 競技の経験値が少ないこともあり初戦の強豪・オーストラリアは敗戦。しかし続くイラン、そして決勝トーナメント準々決勝でもウズベキスタンを破りベスト 4 に進出するが、準決勝で中国に 14-18 で惜敗し残念ながらメダルには届かなかった。スピードを生かしたドライブは効果的だが、ミスマッチをつかかれたオフェンスへの対応等、今後の強化に向けての課題が明らかになった大会であった。

また 7 月に栃木県で行われた FIBA 3x3 U23 Nations League 2018 には、現役 W リーグ・プレーヤーの栗林、高原、山本、宮下の 4 選手が参戦。強豪中国を含む、スリランカ、インドネシア、モンゴルすべてに勝利し優勝を収め、5 人制のみならず 3x3 競技においても女子代表の可能性を示す結果を残すことができた。それを裏付けるように 8 月のアジア競技大会（インドネシア・ジャカルタ）では、予選ラウンドを 3 戦全勝で突破すると、決勝トーナメントでもインドネシア、チャイニーズ・タイペイに連勝し決勝進出。決勝は世界ランキング 1 位、ワールドカップ 2018 にて 4 位になった中国との対戦。女子代表（奥山、今野、馬瓜、宮下）は馬瓜ステファニー選手が 5 人制より急遽追加登録してのチーム組成で挑む中、点差こそ中国に対して 10-21 と大きく離されてしまったが、代表活動日数を確保しチーム作りを行っていけば十分に

大舞台でのメダル獲得が狙えることが証明された。続く10月に中国・西安市で行われたFIBA 3x3 U23 ワールドカップ2018においては、栗林、小山、山本、馬瓜の若手選手が奮闘。予選リーグでアルゼンチン、フランスに両試合共に1点差で勝利すると、決勝トーナメントでもハンガリー、ウクライナを下し決勝に進出。大会ベスト3に選出された山本麻衣選手を中心にゲームを組み立てるが、ロシアの失点後のカウンターアタックに後手にまわり惜しくも準優勝という結果となった。2019年3月には男子同様に、Wリーグ選手も含めた代表強化合宿を実施。2019年は世界ランキング4位以上を目指し継続的な強化を図っていく。

<主な国際大会の成績>

- ・ FIBA 3x3 ASIA CUP 2018 (中国・深圳市) 4位
- ・ 第18回アジア競技大会 (インドネシア・ジャカルタ) 2位
- ・ FIBA 3x3 U23 ワールドカップ 2018 (中国・西南市) 2位
- ・ FIBA 3x3 U18 ASIA CUP 2018 (マレーシア・サイバジャヤ) 5位

II 育成

1. 選手育成事業概況

2018年度はナショナル育成センターとしてU13/U14を実施した。継続して行っている成果として、前年度経験者が含まれているため実施内容の理解が進んでおり、次の段階の指導が可能となりレベルアップした内容となった。ブロック育成センターとしてU12/U13/U18を実施した。U13とU18においてはタレントスカウティングをテーマとして都道府県育成センターで実施できる内容を紹介した。ジュニアユースアカデミーを男子は中3～高2、女子は中1～中3を対象に行った。男子は対象カテゴリーをあげることが成果(U16・U18代表)に繋がった。女子においてもU16代表に選出される選手が複数おり、男女共に長身選手育成がアンダーカテゴリー代表候補と連動できていた。

都道府県育成センターをU12/U14/U16各カテゴリーで準備を行い、2019年度完全実施に向けて組織体制、スケジュール調整を行った。

2. マンツーマン推進事業概況

2018年度はU15世代において「予測に基づくプレーを許容する」という基準に変更したため、全中において「ゾーンプレス・ゾーンディフェンス」が幾つかのチームで見られた。このことへの対応策として「マンツーマン推進の目的の再確認：個の育成」を再度周知し、コミッショナーには「オフボールディフェンスのポジションビジョンを注意して見ること」を喚起した。また赤旗があげられた際にはゲームを止める対応に変更し、やり得を防ぐ手立てを講じた。3年を終えて検証した結果、施策は継続して実施する方向性を確認した。

3. 指導者養成事業概況

2018年度は指導者資格の登録・管理窓口一本化に伴い、A級・B級コーチ養成講習会において共通・専門科目共にJBA独自開催を実施したほか、B級専門科目を複数回(3回)開催した。また、2021年度の正式S級ライセンス移行に向けた制度設計を行い、研修会については例年通り、コーチクリニックとコーチカンファレンスを実施した。その他、都道府県が担当する研修会内容としてインテグリティに関するカリキュラムを新たに作成、2019年度からのコーチライセンス制度改定に向け、C級D級講習会の教材作成、コーチデベロッパーの養成などを行った。

III 競技会

1. 国内競技会概況

JBA主催主管の4大会(天皇杯・皇后杯、ウインターカップ、ジュニアオールスター、全国ミニ)を無事終了した。

天皇杯決勝においては、さいたまスーパーアリーナ（低天井バージョン）での好ゲームにて満席感を醸し出せるまでの集客ができたが、皇后杯においては集客に大きな課題が残った。

ウインターカップは、ソフトバンク社との共同事業的なスキームで行い、次年度への継続的な事業協力を繋げる。

Jr.オールスターは、第 32 回大会にて大会終了となり、次年度は、U15 選手権プレ大会として大会形式を大きく変更する。同大会と全国ミニでは、インテグリティ委員会と連携し「暴力暴言根絶」へ向けた活動を行った。

2. 国際競技会概況

JBA 主管の国際競技会としては、FIBA ワールドカップアジア予選の各 Window（3～5）のホームゲームおよび男女日本代表の国際強化試合を実施した。

ワールドカップ予選では、男子日本代表がスタートからの 4 連敗後、6 月の Window3（ホームゲーム）から 8 連勝を成し遂げ、ワールドカップ本戦出場を獲得。各ホームゲームでは、アリーナ満席を実現した。

また、女子日本代表の国際強化試合では、白熱した試合展開も奏功し、当初の見込みには及ばなかったものの、過去の子日本代表戦と比較して、集客面では健闘した結果となった。

IV 審判

1. 審判事業概況

2016 年度の審判ライセンスの国内統一移行後、審判ライセンス取得者は今年度で 50,000 人を突破し、2015 年度比較で約 680%増となった。また、2019 年度から審判インストラクター制度を完全実施するため、2018 年度はライセンス取得年度であったが、T 級 27 名、1 級 75 名、2 級 284 名、3 級 1,931 名、合計 2,317 名が取得をした。今後、JBA として同じ判定基準、メカニク等を全国に伝達できるよう、審判インストラクター制度を充実させていきたい。さらに、全国大会においては 3PO 実施に向け各連盟等と協議し、普及を目的とした大会を除き、2019 年度から全大会で 3PO 実施となる。これに伴い、A 級審判員のレベルアップに今後取り組んでいく必要がある。

2017 年度に JBA 公認としては初のプロフェッショナルレフェリーが誕生し、トップリーグ審判を中心に活動を行い、また FIBA 主催大会で活躍している。

3x3 においては、審判員登録制度として 3x3 審判員の普及育成強化を進めた。またトップリーグ担当審判選考会も実施し、50 名程度を選出した。今後さらなる普及育成強化を果たすため、5 対 5 同様 3x3 プレーコーリング・ガイドラインを作成し、またガイドラインに沿った映像作成により、判定基準の統一化を果たしていきたい。

2017 年度から 6～8 月に実施しているブロック連携会議（各ブロックの方々との意見交換会）は、JBA 審判の方向性、事業の考え方を伝え、また各ブロック・都道府県の声を直接聞く事ができる非常に意義のある会であると感じている。各種改革を JBA と都道府県が同じ方向で進めていくためにも今後も継続して実施したい。

V 普及

1. 普及事業概況

これまで継続的に行っているドーピング・コントロールおよびドーピング防止教育・啓発活動の実施の他、本年度はインテグリティ委員会の設立に伴い、大会会場や練習現場などでの【暴力暴言根絶】の取り組みをスタートした。具体的には、ジュニアオールスターおよび全国ミニで先行実施し、2019 年 4 月 1 日より全国で実施していく。

また、2018 年 3 月 19 日にスポーツ庁より公表された「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」において、中央競技団体に対して指導手引きの作成が要請されたことを受け、中学校向けの「部活動指導手引き」を作成し公開した。今後は小学校教員向けの簡易教則本（教材）の作成に向け検討を進める。

その他、本年度はバスケットゴール増設のための寄付を 2 件頂いた。バスケットゴール寄贈実現のため、今後はより多くの方々から寄付が得られるように努力したい。

VI 3x3

1. 3x3 国内大会概況

第4回 3x3 日本選手権大会を2018年5月末に東京体育館にて実施し、男子優勝チームが「FIBA3x3 World Tour Penang Masters (マレーシア/ペナン)」の出場権を獲得した。

第5回 3x3U18 日本選手権大会を2018年12月に高崎アリーナにて実施したほか、2017年度から本格的に開催した JAPAN TOUR を体験型の「CHALLENGE」、普及型の「OPEN」、育成強化型の「EXTREME」の3カテゴリーに振り分けて5月～9月に実施した。特に「OPEN」・「EXTREME」のFINALは大盛況であった。また、EXTREME 優勝チームが「FIBA 3x3 Edmonton Challenge (カナダ/エドモントン)」の出場権を獲得した。

2. その他 3x3 事業概況

東京2020に向けたNTO員養成のため、3月に候補メンバーを集めたワークショップを開催した。また、NFランキング向上のため、FIBA Event Maker の使用の重要性と操作方法の説明会を、都道府県協会の担当者を集めて3月に実施した。

VII 出版物等販売事業

1. 出版物等販売事業概況

2018年度は、2018年4月1日からのFIBA競技規則「Official Basketball Rules 2017」の国内適用に伴い、競技規則書(ルールブック)の改訂版の販売を開始した。同時にJBA公式サイト上にも競技規則書の全文を公開したが、販売数に有意な影響は見られなかった。

また、同じくFIBAルール改変に伴う国内における公式スコアシートの改訂を行い、2019年4月1日からの導入に合わせ、2019年3月より販売を開始した(2020年4月1日からの完全導入を目指す)。

VIII 認定および登録管理

1. コーチライセンス概況

S級～E-2級、S(F)級～B(F)級までの認定を実施。登録数は前年度比5,263人増(111.7%)の50,068人となった。

<コーチ登録数> (単位:人)

S級※	A級※	B級※	C級	D級	E-1級	E-2級	合計
72	211	692	9235	10,507	13,365	15,986	50,068

※ S(F)級、A(F)級、B(F)級コーチを含む

2. 審判ライセンス概況

2018年3月1日時点で審判ライセンス取得者(登録数)は前年度比3,916人増(108.5%)の50,206人となり、新ライセンスシステム移行前の2015年末(7,347人)と比較し、42,859人増(683%)となった。

また2019年度審判インストラクター完全実施に向け、2018年度審判インストラクターライセンス取得者は2,317名であった。

<審判登録数> (単位:人)

S級	A級	B級	C級	D級	E級	合計
123	263	5,244	8,566	14,854	21,156	50,206

3. 役員、審判、コーチ、チーム、競技者（3x3を含む）の登録概況

チーム加盟数はほぼ横ばいではあるが、2000年度の登録制度改定（個人登録制度導入）後では、最多のチーム加盟を記録（制度改定前の1999年度は36,233チーム。その後の最多は2014年度の34,313チーム）。審判登録数、コーチ登録数は伸び続けており、いずれも5万人を達成。

	2018年度	2017年度	前年度比	
チーム	34,427チーム	34,069チーム	101.1%	358
競技者	622,506人	632,883人	98.4%	-10,377
3x3競技者	868人	896人	96.9%	-28
審判	50,206人	46,290人	108.5%	3,916
コーチ	50,068人	44,805人	111.7%	5,263

なお、2018年3月に新登録システムを稼働したが、重大なシステム不具合が発生し、旧システムへの切り戻しを実施。2018年度は新システムの再稼働に向けて準備を進め、2019年3月に新システムによる2019年度登録受付を開始した。

IX 組織運営

1. 諸会議の開催、運営概況

2018年度は評議員会、理事会といった公益法人としての必置機関の運営の他、専門委員会として新たにインテグリティ委員会を設置、当該委員会を中心として、暴力・暴言根絶を目的とした諸活動を推進した。

また、2020年度以降の国内競技環境の中長期方針を検討するために（期限を設けず）設置された特別委員会・将来構想委員会では、まずは男子の国際大会方式の変更に伴い、Bリーグや天皇杯等の中長期的な開催方針の立案に向け協議を行った。

その他、裁定委員会および法務委員会を中心に裁定・規律関連規程の整備を行い、これまで専門委員会の一委員会であった規律委員会を裁定委員会と同位置に位置付け直すこととし、また併せて、各都道府県協会における裁定委員会、規律委員会の設置を推進した。

2. アンダーカテゴリー部会の運営概況

2018年度よりU12/U15/U18の各カテゴリー部会を組織した。

U12カテゴリー部会では、日本三連と「併走」として、円滑な組織移行を目指したが、名称が2つ存在することで組織も2つあるとの誤解が生じ、混乱を招いたため、2019年度を移行期間とし、2020年度から名称も一元化を図ることとした。また、都道府県におけるリーグ戦の推進を図るとともに、登録・移籍規程を見直し、指導者と競技者のミスマッチ解消を図った。さらに、競技規則の一部変更を実施し、競技環境の充実を図った。

U15カテゴリー部会では、全国中学生連盟より組織を完全に移行した。登録においてはBユースチーム（男子のみ）およびクラブチームの登録を開始するとともに、年度内1回の移籍を認め、部活動引退後も活動ができる環境を整えた。また、リーグ戦の実施および全国U15選手権大会（仮称：ジュニアウインターカップ）の実施に向けた要項案の策定等により、新たな競技環境の充実を図った。

U18カテゴリー部会では、都道府県U18カテゴリー部会長およびブロック幹事を決定し、都道府県協会傘下の組織として充実を図った。また、全国部会長会議において、今後のU18世代における競技環境および育成環境の整備充実についての方向性を伝達し、都道府県内における周知を図った。さらに、都道府県におけるリーグ戦実施に向けた進捗状況を調査し、2020年度の実施に向けて取り組みを促した。

3. D-fund 制度の運用概況

2018 年度は D-fund 制度施行初年度ということで、各都道府県協会（PBA）への交付金額（内定額）の検討にあたり、前年度登録料収入の不足分相当を前提とすることで進めた。また、事業規模が大きく、登録体系の改訂により大幅な減収が見込まれる PBA（北海道協会/千葉県協会/神奈川県協会/愛知県協会/大阪府協会）に対しては、交付金額により幅を持たせた「特例 PBA」と位置付けて対応することとした。

なお、最終的な交付金額の確定に際しては、各 PBA の事業改善努力（受益者負担の導入等）により、想定以上の返金額が発生した。

今後の課題としては、各 PBA の申請・報告手続きの効率化、報告書提出時期の徹底（事業終了毎に都度報告書の提出を推奨しているものの、実態では年度末にまとめての提出が多かった）等が挙げられる。

4. 国際関連活動概況

2018 年度は FIBA バスケットボールワールドカップ 2019 アジア予選が 2018 年 6 月、9 月、11 月、2019 年 2 月と 4 開催あり、ワールドカップ出場権獲得のために男子日本代表チームの活動に対する側面的支援を行った（強化試合：2018 年 6 月韓国代表戦、海外合宿等）。

女子日本代表チームは 2018 年 9 月にスペイン・テネリフェで開催された FIBA 女子ワールドカップ 2018 に向け、国際試合（2018 年 5 月ベラルーシ代表戦、2018 年 6 月チャイニーズ・タイペイ戦・中国戦、2018 年 8 月カナダ戦）および海外遠征（2018 年 7 月スペイン遠征、9 月アメリカ・スペイン遠征）の調整を行った。

その他、アンダーカテゴリー日本代表チームの海外遠征、国際大会出場にも側面的支援を行った。

若年層選手（18 歳未満）の国際移籍の FIBA の監督体制が強まっているが、FIBA との折衝により日本国内における新たなルールを策定し、円滑に導入することが出来た。

2018 年度には新たにオーストラリアバスケットボール協会とのパートナーシップを締結し、2019 年度に具体的な活動を計画し、選手、指導者、レフェリー育成や代表チーム間の交流を促進する。

2019 年度は FIBA および FIBA Asia の役員改選年となるため、改選に向けた対策を講じるべく、情報収集およびロビー活動を積極的に展開。

国際としては、2018 年度は活動が多い 1 年ではあったが、FIBA、FIBA Asia、他国 NF との関係が更に強固になる 1 年であったと考える。

X 広報

1. 広報活動概況

日本代表活動や各種全国大会、国際大会等に関する情報発信を中心に、情報展開および露出拡大を図った。特に、男子日本代表のワールドカップ予選については、B リーグ広報との連携（業務委託）を締結したことにより、よりアグレッシブな動きが実現、4 連敗から 8 連勝で自力出場を決めるという劇的な展開も結果的に追い風となり、多くの露出が実現したと考える。

一方の女子日本代表については、ワールドカップが今期のメインイベントであったが、世界的な強豪の一つとしての立場を確立しつつある現在、取材の趣旨はすでに東京 2020 オリンピックを意識したものが多く、広報として JOC との連携も行いながら対応した。

3x3 のオリンピックの正式種目化が実現したことにより、3x3 についてもメディアの注目が集まるようになったが、3x3 については、広報体制が十分には整っておらず、その機会を生かしきれたとは言えない。しかし、徐々にメディアへのアピールも奏功し、露出につながる傾向にあり、今後、一層注力していきたい。

2019 年度については、上述したとおり、男子のワールドカップ本大会に加え、東京 2020 オリンピックの前年であることから、

メディアの注目が集まる年度になると思われる。アンダーカテゴリー、育成、審判、天皇杯・皇后杯やウインターカップをはじめとする各種大会など、その他のコンテンツについてもニーズに応え、それぞれの機運の盛り上がりを逸することなく、バスケットボールの周知・価値向上に努めたい。